



Title	エストニアのMausk : アニミズムを再考する
Author(s)	本間, 愛理
Citation	研究論集, 14, 37(左)-54(左)
Issue Date	2014-12-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/57690
Type	bulletin (article)
File Information	14_003_Homma.pdf



[Instructions for use](#)

エストニアの Maausk

— アニミズムを再考する —

本 間 愛 理

要 旨

本稿では、宗教人類学の立場に立ち、スピリチュアリティ論やアニミズム論の流れの中にエストニアの Maausk を位置づけ、特にそこで見られる自然と人間の関係性に注目して考察を進めている。また、かつては文化進化論の文脈で用いられたアニミズムという古典的な概念を、Maausk を通して再考することの意義と、そこで Maausk がどのような貢献をなし得るのかを検討している。まず、かつては国教の地位にあったルター派キリスト教が、ソビエトによる支配の時代を経て、著しく衰退した現代エストニアで、Maausk という「エストニア人固有の土地」との結びつきを強調する動きが、人々に親しみを湧かせていることを契機として、それまでのエストニアや Maausk の歴史を振り返っている。そして、人間だけではなく、人間を取り巻くあらゆる非人間も「スピリット」を持っており、それらとの調和的な関係を保ち、うまく生きていくことを目指す Maausk の特徴は、自然と文化を決して切り離さない点にあることを論じている。Maausk は、エストニアの自然の中で人々がつないできた自然との関係性だけではなく、その関係性の中で生まれた「伝統文化」を重視する。そこでは、文化を持ち環境に適應する人間とその周囲に外在する自然という、自然と人間を対峙させた世界の捉え方ではなく、自然と文化をひとつながりの連続体とする世界の捉え方がなされていることが明らかになった。Maausk を通して結ばれる、人間と非人間、人間と人間の関係性は、矛盾や葛藤がありながらも、よりうまく生きていくためのポジティブなつながりとして探求されている。ナショナリズムに陥る危険性や、Maausk に関わることによる人間関係の不具合などの課題は残しつつも、自然と文化の融合の中、すべてのものがひとつの関係性に生きていることを意識し、人間の目には見えない世界、すなわち、スピリットの世界に目を開かせる Maausk は、アニミズム概念や人間中心主義を考え直す大きな手掛りとなるだろう。

1. はじめに

2月半ばのエストニアは、マイナス20度近くになることがめずらしくもない気候なのだが、2014年は暖冬らしい。「空の家」という意味の土地、タエヴァスコヤの駅を降りると、雪は多少積もっているものの、曇り空から小雨が降っている。「天が地に触れるところ」"Koht kus taevast puudutab maad" というキャッチフレーズを持つタエヴァスコヤは、氷河期の終わりから数万年かけて、アプヤ川が砂岩の川底を削り取って形成された岸壁だ。およそ20メートルに達する、赤や黄色や灰色が混ざった層の風景は、観光資源として人々をひきつけるが、冬季はふるわないうようで、閑散としている。周りを取り囲むマツの木々の枝先からは、無数の水滴が光を湛えては、地にすい込まれていく。薄もやの中、散策用のトレイルを川沿いに進むと、3年前の夏に訪れた時には透き通った水が流れ、涼やかだった泉が、最近洞窟が崩れたせいで黄土色に濁っている。歩きながら、ふと目を上げると、一本の木に、いくつかりボンが濡れて結ばれている。誰かが、願い事をしたのだろう。エストニアには、木に願いをきいてもらう代わりに贈り物、つまり前もっての「お返し」として枝にリボンを結わえる習慣があるのだ。そして、それはMaausk的な慣習であるとされている。

エストニアの第2の都市、タルトに住むSさんの家には、スピリットがいる。自宅には、家に住むスピリット用のボウルがあって、料理をしたらその最初のひと欠けを入れ、ある程度たまると燃やす。長い間入れることを怠っていると、料理をこぼすようになることで、スピリットが怒っていることを気づかせてくれると言う。また、Sさんは、妊娠が明らかになった後、20週目までそのことを夫との間でしか共有せず、親にも教えなかった。「自然は20週目まで妊娠を見せない」からだ。秋に出産した子どもの名前は、春まで秘密にされた。友人や親戚が戸惑う、これらのことは、SさんがMaauskのリーダー格の男性と結婚するにあたり、エストニアの伝統について書かれた本を通して学んだ知識によっている。

Maauskとは、いったい何なのか。本稿では、日本ではその存在をほとんど知られていないエストニアのMaauskを、宗教人類学の立場に立ち、特に自然と人間の関係性に注目して紹介する。そして、「アニミズム」という古典的な概念を再考することに、Maauskがどのような貢献をなし得るのかを検討する。

2. Maauskの位置づけ—スピリチュアリティ論とアニミズム論の流れの中で

2.1 スピリチュアリティとネオペイガニズム

スピリチュアリティspiritualityとは、「霊性」と訳されるもので、「超越的・神秘的な体験に親しんだり、神仏や高次の精神的次元に意識を向けようとする個人の特性や意識・実践様態を指す」(島藺 2009) など、定義は様々になされているのだが、非常に大きな範囲を含んでおり、

流行語としての側面もプラスされ、幅広い意味をもつ。既成宗教ではないかたちの「信仰」を、ひとまとめに「スピリチュアリティ」の語に詰め込んでいるという感も否めない。何らかの超越的・霊的存在とのやりとりがあり、「信仰」に近い様相を示すものがすべて「スピリチュアリティ」として扱われているのだろう。つまり、従来の「宗教」概念からこぼれおちる信仰が、スピリチュアリティである¹。

スピリチュアリティが存在感を示し始めたのは、1960年代後半からである（伊藤ら 2004）。それまでの宗教伝統から切り離された形で、新たな宗教意識やスピリチュアリティの目覚めに関する運動や文化に注目が集まってきたのだ。これらは「ニューエイジ」「精神世界」と呼ばれるようになる。70年代から80年代にはスピリチュアリティと言えばニューエイジ・スピリチュアリティのことであり、それは主流文化に対抗するサブ・カルチャーとしての存在を抜け出るものではなかった。しかし今では、スピリチュアリティは主流文化に浸透し、かなり裾野の広いものとなっている。書店に行くと、この類の本で埋め尽くされた棚があることが別段驚くべきことではない現状だ。また、現在では、スピリチュアリティとスピリチュアリティでないものを区別すること自体が難しくなっている。アロマセラピーやヨガ、リフレクソロジー、気功、風水などは、ニューエイジという枠を越えて、多くの人たちに実践されている。スピリチュアリティは巷に氾濫しており、自身では意識していなくとも、人々は身近なところでスピリチュアリティ的なものと遭遇し、受け入れ、再生産している。

スピリチュアリティの流れの中で注目されるのが、「異教運動」と訳されるペイガニズム *paganism* である。もともとペイガン *pagan* とは、ユダヤ教・キリスト教・イスラーム以外を信じる人々を指す言葉だった²。一神教が創造神・唯一神を崇拜するのに対し、ペイガニズムでは自然崇拜的・多神教的な信仰が特徴とされる。宗教進化論に則るならば、一神教化（キリスト教化）し、ペイガニズムの段階を乗り越えたと思われていた現代の人々だが、資本主義への幻滅や、過剰開発ゆえの環境破壊に対する罪悪感など、「西欧近代の限界」に直面したときに、自らを生態系の一部として考える「方法論的なアニミズム」（間瀬 1996：98）の有効性を求めてペイガニズム復興運動を巻き起こした。そうして生まれたのが、ネオペイガニズム *neo-paganism*（新異教運動）だ。

¹ 研究の場で、「霊性」ではなく、「スピリチュアリティ」という言葉が用いられる背景には、日本語の「霊」という言葉が「幽霊」や「おばけ」などを連想させ、無意味な誤解を招く恐れがあるのではないかという配慮がある（伊藤ら 2004）。なお、後述するタイラー（1874）は、アニミズムという語を採用した理由として、当時「スピリチュアリズム」という語が、一般に米英で流行していた心霊主義・心霊探求セクトを指すものとして使われており、それと区別するためであると述べている。

² ペイガンは、メインストリームであった人々により、侮蔑的な意味合いを込めて用いられてきた語であるが、今ではネオペイガニズムに関わる人々が積極的に自らペイガンを名乗っている事例も少なくない。

ネオペイガニズムの特徴は、多神教的、アニミズム的、折衷主義的という言葉で表される(土佐 1997)。それらは、人間を含めて世界のあらゆる存在は相互に結び合わさっているという世界観に基づく。また、反家父長的、女性的、多神教的、自然志向的など、キリスト教や西洋社会の支配的価値と一般に見なされているイメージの裏返しが多い。土佐(1997)によると、ネオペイガニズムのフォロワーは、宗教的な周縁性を選択した以外には、社会の主流に完全に適応している。むしろ、主流であるからこそ、そこから敢えてはずれるという選択をすることができるとも言えるだろう。

ここで、西欧近代やその長とされるキリスト教は、反抗され乗り越えられるべきものとしての役割を果たしているが、それはある意味、西欧近代が共通の強力な前提、基盤とされていることを示している。つまり、西欧近代やキリスト教をすでに受容しているからこそ、その世界観に反するものを、意図的に提示できるということだ。この点において、スピリチュアリティやペイガニズムは、「反動」としてとらえることができる。そう考えると、これらの現象は、西欧近代のひとつの産物であるとも言えるものだ。

2.2 アニミズム再評価の意義

ペイガニズムの「あらゆる存在が相互に結び合わさっているという世界観」に関連して、重要なキーワードとして挙げられる概念がアニミズムだ。もともと、アニミズムという概念が用いられたのは、文化進化論の文脈の上においてであった。タイラー(1874)は、アニミズムを「霊的存在への信念」(the belief in Spiritual Beings)であるとし、「低級な民族」の「宗教の最も粗末な形態」として語った。つまり、それは多神教やそのさらなる高みに君臨する一神教に進歩するべき、下位の宗教として語られた。一方、アニミズムは「野蛮人から文明人までのすべての宗教哲学の基礎である」(1874:426)ため、宗教の起源であるだけでなく、宗教発展の各段階を通じて存在するとも述べた³。タイラーのアニミズム論は、マレットのアニマティズムや、コドリントンのマナ説によって改変・増補がなされたが、文化進化論が批判され、克服されたことが大きな要因となり、影響力が衰えた。また、アニミズムという概念が広すぎて分析のための鋭さに欠ける、漠然としていてそれぞれの違いを見逃すことになるとの批判も加えられている⁴。

しかし、近年になってアニミズムを再評価する動きが活発になっている。なぜなら、アニミ

³ タイラー(1874)は、インテリアのデザインや服の流行を例に、文化の進歩・退化・残存・再興・修正について述べた。これらの中では特に残存説 survival が知られているが、当時の社会での降霊術などの流行は、残存ではなく再生(revival)であるとした。ここで、残存は未開社会に見られ、再生は文明社会に見られるものであると関連づけている(関 2004)。

⁴ 様々な批判がなされているが、タイラーの大きな功績は宗教の定義を拡張したことにあるだろう。「未開民族」の宗教を、宗教ではないと片付けなかった点では、懐が広がった。

ズムとは「生活世界に根ざし地域ごとに異なる自然との関わりをめぐる思考と実践であり、人間は個としてではなく、外界や宇宙、地縁や血縁、他界や異界とのつながりで生きることを再確認させる」（鈴木 2009：465）ものであるからだ。また、「その根底にある生命が満ち溢れる世界をとおして、自然や環境という画一化された近代概念を再考させる」力をもつからである（鈴木 2009：465）。岩田（1989）は、アニミズムについて、日本古代の神々について述べた『古事記』の文章を引用している。「草や木がそれぞれに言葉をしゃべり、国土のそこそこで岩や、石や、木や、草の葉がたがいに語りあい、夜は鬼火のようなあやしい火が燃え、昼は群がる昆虫の羽音のように、いたるところでにぎやかな声が出た」（岩田 1989：92）。人間の生活を取り巻くあらゆるもの、生物に限らず無生物も魂を持ち、言葉をかわしている様子だ。このような、山川草木に「人格」を見出す世界の見方がアニミズムである。

デスコラ（1996）は、西欧近代で前提とされているコスモロジー、すなわち、自然と文化の二項対立を相対化した。自然と文化の二分法は、構造主義人類学において神話、儀礼、分類などを分析するために非常に有効な装置だった。しかし、「自然が確かに存在するという信念」（1996：88）でしかない西欧の自然主義を、普遍的な世界の見方とすることはできない。そこで、トーテミズムやアニミズムを挙げながら、自然主義を人間と非人間の関係の捉え方のひとつにすぎないとしている。デスコラ（1996）によると、トーテミズムでは、自然における種の非連続が、人間の社会的単位を表すものとして用いられる。他方、アニミズムでは、自然に人間的性質や社会的性質を与える。つまり、トーテミズムは自然を軸に社会を捉え、アニミズムは社会を軸に自然を捉えるものである。これは、トーテミズムが自然を人間に投影しているとか、アニミズムが人間を自然に投影しているという話ではない。両者ともに、自然と人間の間には、社会的な連続があるとする考え方だ。自然主義のように、自然と人間をあらかじめ二項に分け、それらが互いに作用し合っているとするのではなく、非人間も人間も連続したひとつの関係性の中にあるとしているということだ。デスコラのアニミズムとタイラーのアニミズムが異なるのは、この点である。タイラーは、「霊的存在者は、人の魂に関する原始観念に基づいて、人を模型として考えたもの」（1962：189）であるとし、「人が神の型であって」、「人は、その神々に、人の形体、感情、性質を付したから、擬人化したと称してよかろう」（1962：212）と述べている⁵。タイラーによると、アニミズムとは、人間をモデルに、非人間の人間化をするものだ。つまり、人間以外のものに、あたかも人間であるかのような人格を与えるものだ。タイラーのアニミズムでは、このような方法で自然と人間を同等の存在としているが、それは自然を擬人化して人間のレベルにまで引き上げているということになるので、アニミズムを再評価したとして、人間中心主義を克服することが可能になるとは限らない。

⁵ 「人が神の型」である、すなわち、「神が人に似せて創られた」ということは、ユダヤ・キリスト教的な「人は神に似せて創られた」ことと対比的である点は興味深い。

しかし、アニミズムが自然の擬人化にすぎないとする理解は、一面的なものだ。人間中心主義からの脱却に関して、ヴィヴェイロス・デ・カストロ（1998）が提案するパースペクティヴィズム（観点主義）や多自然主義の視点が貢献するところは大きい。パースペクティヴィズムとは、次のような発想の転換から理解することができる。普通、人間は、人間を人間、動物を動物、スピリットをスピリットとして見ていると考えられる。しかし、捕食者である動物やスピリットが、人間を獲物である動物として見たり、獲物である動物が人間をスピリットや捕食動物として見るという事態も十分考えられる。そのような時、動物やスピリットは、自らを「人間」とする。例えば、ジャガーが血をピールだと見る、コンドルが腐敗した肉にわくウジをグリルされた魚と見る、毛皮や羽毛や鉤爪やくちばしを身体装飾あるいは文化的道具と見るというように。こうして、動物は人間である、あるいは自らを人として見ていると言うことができる（Viveiros de Castro 1998: 470）。ヴィヴェイロス・デ・カストロによると、観点を持つすべての存在が主体である。観点があるところに、主体があるのだ。これは非人間の擬人化ではなく、動物や人間やスピリットが持っている、自己や他者の関係性についての観点が、互いに等しいものであり、観点を持つ主体（人間、文化）として存在していることを意味する。このような観点主義は、「人間性」がホモ・サピエンスに限られた特性ではないことを示している。以上のように、西欧近代の自然主義が単自然主義・多文化主義であったのに対し、観点主義では多自然主義・単文化主義となるのである。ここに、擬人化ではない様式でのアニミズムがある。「人間性」を人間に限定するならば、アニミズムは擬人化になるが、観点主義のように「人間性」を人間以外の存在にも認めるなら、アニミズムは擬人化を超えた世界の見方であると言えよう。

アニミズム概念を用いて試みられているような、自然と人間の関係性の問い直しは、二元論から一元論へと向かう方向性をもっている。ラトゥール（2008）は、近代は「自然／文化」の二分法によって支えられてきたのにも関わらず、現実にはそのハイブリッドが増殖していて、二分することができない状態にあると述べ、「縫い目のない布地」としての「自然—文化」という捉え方を提案した。この捉え方は、デスコラによって指摘されていた、非人間も人間も連続したひとつの関係性の中にあるという考えによく似ている。ペイトソン（1992: 2006）によると、世界を分類し固定的に捉えることに慣らされた人間は、「生物世界と人間世界との統一感、世界をあまねく満たす美に包まれてみんな結ばれ合っているのだという安らかな感情」（2006: 23）を失っている。それで、彼はこれまでの宗教や神々によって統一されていた世界が、いまやばらばらに散らされていてまとまることがない状態にある中、従来宗教が担っていた「聖」概念をエコロジーに移し替えた。ダーウィンの系統図やその他諸々の科学の多くが、世界を区切り、細部化を推し進めた結果、世界の結びつきは崩壊したかのように見えた。しかし、エコロジーはすべての「われわれ」⁶が関係し合っているとするため、そのホリスティックな世界観

⁶ ペイトソンが用いる「われわれ」には、人間だけではなく、ヒトデもレッドウッドの森林も合衆国

は、解体された「われわれ」を再び結合する可能性がある。これらの関係論的なアプローチを提案する著者たちは、二項対立や分類を乗り越えて、世界をひとつなかりに捉える視点を持っている。

以上の先行研究を踏まえて、本稿では、スピリチュアリティ論と、その文脈において注目される自然と人間の関係性を表す概念としてのアニミズム論のアプローチを用いて、人々が Mausk を通して自然といかに関係を結んでいるのかを考察していく。

3. エストニアの Mausk

3.1 エストニアの宗教的背景

現在のエストニアは、EU の統計結果も手伝って、一般には「ヨーロッパで最も宗教的ではない国」であるとされている。しかし、ポスト世俗化社会の例にもれず、スピリチュアリティのような非公式的な「信仰」は、人々の間に広く行き渡っている。公式的宗教、特に国教の地位にあったルター派キリスト教については、1991 年のソ連からの独立回復後に宗教ブームが起こったことで、信者の数は一時的な増加を示したが、その状況は続かず、勢いは衰えるばかりだ。Plaat (2003) によると、第 2 次世界大戦以前には、国民の約 80% がルター派キリスト教会への所属を自覚していた。しかし、ソビエト時代の宗教弾圧により、学生であれば退学、教員は免職、神学部の閉鎖や教派の強制統合、宗教的出版物の禁止、聖職者の逮捕や強制移住などがなされた⁷。このような厳しい弾圧により、宗教が格段に無力となった面はある。しかし、それ以前の問題として、エストニアにおいて、騎士団によってもたらされたキリスト教が暴力と結び付けられてイメージされてきたことや、バルト・ドイツ人という領主の宗教として始まった後も、聖職に就くのはドイツ系の人々であり、農民であったエストニアの人々に根づかなかったことが言及される (Plaat 2007)。とは言うものの、時間の経過とともに、キリスト教が人々の生活の中に溶け込み、馴染んでいたことも確かである。エストニアで使われていた暦の行事に、キリスト教の聖人の名前を被せ、キリスト教以前の伝統とキリスト教がそれらの行事の中にシンクレティズム的に混ざり合っている現状からも、キリスト教が決して農民たちの生活と乖離したものであったわけではないことが明らかである。

このような背景の中、2011 年のエストニアの宗教統計で、「宗教に属している」と回答した人は 23% であり、その内訳としては半数以上がロシア正教会のメンバーであるロシア系住民であ

上院も含まれる。人間を人間だけ、自然を自然だけ切り取って捉えるのではなく、自然も人間も共に世界の一部をなしており、つながりを持つものとして捉えている。

⁷ イデオロギーのためというよりは、教会が抵抗運動の拠点となるのを防ぐ目的であった (鈴木 2000 : Ringvee 2001)。このことは、キリスト教会が人々の生活の中で集まる場所として中心的な役割を果たしていたことがわかる。

る。「どの宗教にも属していない」と回答した人は42%であり、ロシア系住民の2.5倍のエストニア人によって占められている。Maauskは“Earth Believer”として表記されており、その数は1,925名で0.2%にしかない。仲間の“Taara Believer”も1,047名で0.1%だ。一方、同年に日刊紙 Postimees が読者を対象に行った「最も親しみを感じる宗教は何か」というアンケートには、Maausk と回答する人が45%（ルター派キリスト教の約2倍の数字）という結果が出ている。統計では「所属」が問われたため、メンバーシップの有無や、ある程度以上のコミットメントが無ければ「属していない」と答えるほかなかったのに対し、Postimees のアンケートでは「親近感」が問われたため、統計では見えてこなかった人々、つまり、特に所属はしていないけれど、漠然とした親しみ（例えば、季節ごとのイベントとMaauskとの関わりなど）を持っている人々の存在が表れた。キリスト教会にはまったく行かないが、エストニアの暦の「伝統行事」には参加しているという普段の行動から考えると、Maausk が最も当てはまるという人々が、エストニアには多く見られるのだ。

3.2 Maausk が表わすもの

Maausk に好感を持っている人々は、Maausk が騎士団によるキリスト教布教以前からエストニアの土地に根づいていた、エストニア独自の「信仰」と主張する。“maa”とは、土地、地球、国、田舎など多様な意味を含む語であるが、Kaasik は、“*But foremost maa denotes the land or country of indigenous Estonians. Thus Estonians have called themselves maarahvas, their country Maavald and their traditional nature-worship Maausk.*”と述べ、“maa”とは、エストニアの“indigenous”や“vernacular”に関連する、「エストニア人固有の土地」を指すとしている。“usk”に関しては、キリスト教やイスラームと対比しながら、Maausk には聖人や教義、聖典は無いということを示し、Maausk とは、人々が互いと、そして自然の力と調和して生きることを可能にする、“a survival teaching”「うまく生きていくための教え」であるとしている。また、後述する団体 Maavalla Koda のウェブページでは、Maausk とは調和的な世界の見方であり、エストニアの土地や伝統文化、エストニア語と切り離されることのない統一体として生きる、「宗教以上」のものであると説明されている。

“a survival teaching”は、具体的にどのような内容をもつのか。まず、自然と人間、死者と生者などの境界から自由になることである。地に住んでいるすべてのものは、霊を持っていて、その意味で同等であるからだ。「すべて」には、人間だけではなく、例えば、星、月、太陽、水、火、大地、木、石、動物などが包含されている。この「霊」はエストニア語で統一された呼び方は無く、Maausk の場合、南部ではそのような力のことを“ema”（母）や“isa”（父）、北部では“haldjas”（妖精、守護霊）と呼ばれている⁸。このような考え方にに基づき、自然と調和して

⁸ なお、キリスト教の文脈では pühavaim（聖霊；holy spirit）と呼ばれる。

“mõnus” (居心地良く、楽しく)に生きることを志向する。そこに組織は不要であり、何をするかは各々の日常生活における自主的な実践に委ねられている。石、樹木、森林、泉、滝などで、癒しのために祈りを捧げる、食物を捧げる、儀式を行う、自然と会話するなど、聖なる場所を訪れることだけではなく、暮らしの中で、「すべて」とのつながりを意識することや、祖父母から伝統を受け継ぐことなども Mausk では重視されている。冒頭に出てきたような、木の枝に紐を結んで願い事をする事や、スピリットを意識しながら共に暮らすこと、人生の節目の出来事に関する慣習や言い伝えなどを行うことも、もちろん含まれている。

3.3 Mausk の歴史と Maavalla Koda の活動

「Mausk はキリスト教以前のエストニアの “indigenous” で “vernacular” な伝統であり、先祖代々継承されてきたものである」という言説があるが、歴史をふり返ると、そう言いきることはできないことが明かだ。Mausk と密接なつながりを持つ Taarausik について、Plaatt (2002) や Kaasik (2003) は以下のように述べている。ツァーリ支配から脱した 1917 年以降の独立エストニアを確立する要素として、固有の宗教をつくろうとした知識人のグループによって、Mausk を土台に 1928 年に「創造」されたのが Taarausik である。エストニアの神々の中から、Taara⁹ という神を選び、一神教としてスタートした宗教であるが、ドイツやロシア支配時代を経て徐々に多神教化する。現在では Mausk の仲間として同じ団体 Maavalla Koda (Estonian House of Taara and Native Religions) に組み込まれている。確かに、Mausk がキリスト教以前のエストニアの伝統であったとは言えるのかもしれないが、エストニアの独立、ロシアやドイツの時代、ソビエト崩壊と独立回復を通る中で、様々な改良がなされ、今なお変化の途上にあるものだ。当然のことながら、エストニア内での地域差や多様性も存在する。このように考えると、Mausk は、単純なキリスト教以前の「伝統への回帰」であると言うことはできない。

Maavalla Koda (Estonian House of Taara and Native Religions) は、それまでそれぞれ活動していた各地の koda が集まって 1995 年に発足した。民間暦に基づいたイベントや儀式の開催、“hiis” (聖なる森)に関する調査研究やマッピング、“hiis” の保護活動、エストニア伝統文化のアピールなどを行っている NPO 団体である。ルーン暦のカレンダー作成や Mausk 関連のパンフレットなどの出版も行っている。Maavalla Koda が母体となって発足したのが、Hiite Maja Sihtasutus (Foundation of House of Sacred Groves) である。Maavalla Koda が主にエストニアの伝統文化全般を扱うのに対し、Hiite Maja Sihtasutus は、“hiis” など自然の保護活動に力を入れている。Mausk 関係者ではない人々も多く携わっている団体だ。Maavalla Koda と

⁹ Thursday の由来、北欧神話のトールという雷神のエストニア版。エストニアの神話にはスカンディナヴィアからの影響が色濃い。

Hiite Maja Sihtasutus の両団体の活動に携わっている人々もいる。ただし、Hiite Maja Sihtasutus については、宗教色を出さない方針が打ち出されている。

なお、Maavalla Koda では、Maausk のフォロワーを Maausuline と呼ぶ。2人以上のフォロワーを指す時には、複数形 Maausulised となる。訳出することでニュアンスが変わってしまうと益にならないため、本稿でもこれらの用語をそのまま使うこととする。

3.4 フィールドワークの概要

「共生の人文学プロジェクト」に採用していただき、2014年2月13日から3月9日までエストニアでフィールドワークを行った。主に首都のタリンと、第2の街タルトを拠点として、近郊の自然をテーマにした国立公園やエストニア国立博物館、フォークロア・アーカイヴなどを訪問し、Maausk に関する文献を収集し、またエストニアにおける自然と人間の関わり方についての参与観察をした。民俗学者との対話や Maavalla Koda 関係者とのインタビュー、そして一般のエストニアの人々とのインタビューを通じて、Maavalla Koda の活動や個人的な経験や考え、エストニアでの Maausk の位置づけなどを聴き取った。2月24日の独立記念日に関わる一連のイベントの参与観察では、特にナショナルスティックな面を見ることができた。なお、インタビューは英語とエストニア語を用いて行なった。

4. Maausk における自然と文化の融合、そして課題

4.1 自然観と文化観の融合

Maausk において、「自然」が外在的なものとして人間と切り離されて捉えられることは滅多にない。フィールドワーク中、筆者は Maausulised の「自然観」を探ろうとして様々な質問をしたのだが、「自然」についての問いに対して、「文化」についての答えが帰ってくるのが不思議でならなかった。例えば、次のような調子だ。筆者が、木や石や湖、あるいはエストニアの大地などという、いわゆる「自然」に関係する回答を予期しながら、「Maausk の “maa” は何を意味するのか？」と尋ねると、自然についてはそこそこに、「自然だけではなく、季節の祭りのような地域の伝統や文化が大事なのだ」と強調する。このようなことがインタビューの中で幾度もあり、「自然」について話す時、必ず「文化」について言及していることから、Maausk にとっては、両者が切り離せないものなのだということがわかってきた。「エストニア人固有の土地」を意味する “maa” は、実際には土地のみならず、その土地で暮らしてきたことで生まれた物事（いわゆる「文化」や「伝統」）までを含み込む概念であると、Maausulised それぞれが語っていた。そして、人間は自然の一部であるし、文化は自然に基づいてその関わりの中で産み出されるものだと、「西欧近代」が構築してきた自然と文化の二項対立など気にすることなく、さらりと口にする。文化が働きかける対象である「他者」として自然が孤立させられることはな

く、人間が生活する中で編みあげられてきた自然と人間の関わりのまとめりとして、自然と文化の関係は語られる。そのため、自然だけを切り取って保護の対象とすることはせず、先祖が自然との関わりの中で培ってきた祭りや習慣の伝統とともに、ひとまとめに守ることを目指している。「人間が自然を守る」のではなく、「人間と自然の関わりを保つ」のだ。Maausk の「自然観」は「文化観」「人間観」と同じものである。Maausk の土台には、自然は文化であり、文化は自然である、という考え方があろう。自然と文化が個別に存在していて、その上で互いに働きかけ合うものではなく、デスコラ (1996) が述べたように、自然も文化も連続したひとつの関係性の中にあるという捉え方がなされている。これは、自然を擬人化して人間のレベルに引き上げる語り方のアニミズムではない。「必ずしも会話が成り立つわけではないが、自然や場所と話すことができる」と語る N さんや、「樹木や聖なる場所と話すことができる」と言う U さんは、自然が本来人間と対話できない存在だからと、人間化した上で対話したり、逞しい想像力によってファンタジーの世界に生きているのではない。これらは、普段の生活の流れの中に組み込まれており、そのような場所に日常的に立ち寄っている様子だった。現実の世界の中、共に同じ関係性に生きている存在としてコミュニケーション可能な自然と接しているのだろう。

ベイトソン (2006) は世界を結び合わせるエコロジーを「聖」として、世界の統一感を確かに行うことができると述べたが、Maausk も世界が相互に分離してはいないということを確認する場を提供している。自然と人間が共に生きてきた痕跡である「伝統」を通して、古い時代のエストニアとのつながり、祖先とのつながり、死者とのつながり、自然とのつながりを確認するのだ。このように、Maausk は自然と文化を同時に取り上げ、ひとつの関係性の中にあるもの同士として、互いに対話可能な関係性を生み出す手がかりとなっていることが明らかになる。

4.2 エストニア・オリジナルを求めて

以上のようなことから、Maausk は自然と文化の区切りを取り払った開放的なものだと思うが、そう単純でもない。「エストニア」という国をひとつの単位として、他の地域の人々を排除することもあるため、自然と文化の二元論を越えているように捉えられる Maausk が、まったく境界線を持たないものと言うことは決してできない。

「われわれ自身の何か」が欲しい。民俗学者の D さん (40 代男性) は、Maausk がこのようなエストニア人の欲求を満たすものだという。得意分野の IT を除くと、世界でもヨーロッパでも、エストニアは決してメジャーな国ではない。歴史的には、北方十字軍、スウェーデン、ロシア、ナチスドイツ、ソビエトなどにかわるがわる支配されてきたため、「エストニア文化」に「エストニアらしさ」を求めても、見出すことは難しい。東欧にも北欧にも分類されず、ラトビア、リトアニアとともにあくまで「バルトの小国」だ。「エストニア人は、キリスト教以前の知恵を持っているのに、教育などで西洋のキリスト教的考え方にのっとられてしまう」と D さん

は嘆く。辺境に追いやられ、支配されてきたエストニア人が、「われわれ自身の何か」を手にしたという願望は、理解しやすい心理だろう。

Maausk は、支配が始まる前のエストニアがもともと持っていたものであるとされているので、「われわれ自身の何か」にちょうどよい¹⁰。ある時、フィンランド出身の人が Maavalla Koda に入りたいと申し出たことがあったが、リーダーは断ったらしい。その理由は、Maausk は「この土地、この国のもの」だから。フィンランド人は自分の地域の伝統に従ったらどうか、と。その話をしてくれたリーダーの娘である大学生の N さんに、筆者が、「エストニアで生まれ育ったロシア人はどうか」と投げかけると、片親がエストニア人なら考える余地はあるけれど、と迷いながらも、ロシア人はロシア人の伝統に従えばよい、と割り切った回答が返ってきた。Maausk はナショナリズムとの関連も深い。ロシアからの独立の際に、Maausk を土台に Taarausk が創られたという歴史も、そのことを物語っている。「自然」や「土地」は、ナショナリズムとの親和性がある。「国土」、「我が国固有の領土」、「郷土愛」、「原風景」などの言葉をもって表象され、自然は国家に利用される。Maausk の場合、かつては政府との協力関係にあったが、現在はそれほどでもない。しかし、時代の流れによっては再びナショナリスティックな感情を煽る役目を担うという事態も起こり得るかもしれない。

Maausulised は、Maausk の中で「伝統の創造」がなされていることに、極めて自覚的である。インタビューをしていると、「invented」という言葉が頻出する。しかし、そのことを引け目にはせず、むしろ自らの創造力として堂々と語る。エストニアのフォークメタルバンドのギタリストでもある D さんによると、「エストニアの現代文化は、ある意味すべてが新しいもの」であり、何かを創造することは「文化的合意」であると、歴史の浅さを認めながらも、新たな価値を産み出すことをポジティブに捉えていることがわかる。

S さんは、創造的に生きていることが Maausulised の魅力だと考えている。昔ながらのエストニアのレシピで、毎日のパンを自分の手でこねて焼くことも、Maausuline になってから覚えた。自分の生活に必要なものは、全部とは言わずとも、なるべく自分の手をかける。ただの消費者ではなく、自らの生活を創り出す姿勢を持っている点において、一般の人々の経済的にも文化的にも受け身な姿勢との違いがあると語っていた。N さんも、一般のエストニア人は「みんながやっているから慣習に何となく従う」というところにとどまるが、自分たちは能動的に Maausk を学んでひとつひとつの伝統の意味を知っており、その慣習に従いたくて従っているということが特徴だと述べていた。

古い文献を自ら調べ、かつての人々が土地との関わりの中でいかに暮らしていたかを学び、現代を生きている自分たちも手ずからの暮らしをできる範囲で実践する。時には伝統を新しく

¹⁰ 国境や言語から考えるならば、現代エストニアが古代エストニアと同じではないことは自明である。現在のエストニアの区分が形になったのは、そう昔のことではない。

創造しながら、価値を生み出し、うまく生きていくことができるように調整する。こうして、Mausk を通して世界を眺め、「われわれ自身の何か」を形造っていくプロセスが重視されるのだ。

4.3 Mausk によって強められる関係と弱められる関係

Mausk の思想が、基本的に組織ではなく、それぞれの生活の中での実践を重視するものであるにも関わらず、なぜ Maavalla Koda のような団体が発足し、活動しているのだろうかという疑問は当然湧いてくる。Maausulised の SNS への投稿に注目すると、Mausk 関連のイベントがあるとそのページを作って人々を誘ったり、誰かの投稿に応答したりすることがしばしば見受けられる。Maavalla Koda は非営利団体であるため、国の法律に従って年に 1 回の会議を開くなど、最低限の組織立った集まりをする必要はある。リーダーの選挙もするし、メーリングリストもあるという。ただ、エストニアの暦の行事に合わせて集まりを持つことは、自主的にしていることだ。かつてタリン付近の Koda では、月に 1 度の頻度で集会を開いたこともあったそうだ。大学生のときに友人の誘いで Maavalla Koda に参加するようになった U さんの話を聞いていると、そのような集まりについて、非常に楽しそうに語る。そこでは、羊を屠り、穴を掘り、石で囲み、火をつける。ルバーブの葉に包んで、ハーブを入れて食べる。歌ったり踊ったりゲームをしたりしながら、泊りがけで集まる。また、幼い頃から父親と共に Maavalla Koda の集まりに参加してきた N さんは、他の Maausulised と一緒にいて交流すると、わかりあえた感じがするのが好き、と話していた。

同時に、Maavalla Koda 内には不満もある。「厳格すぎる」メンバーがいると、その「正しい Mausk」像がプレッシャーとなる。影響力の強いメンバーが、Mausk としてふさわしいかを判断する傾向があるから、その人の前では自分の意見を述べづらいし、厳格な「Mausk らしい」生活を求められても、都市に住んでいるとその期待に十分に応えることはできないと教えてくれた人もいた。また、Maausuline になった後に、親戚や友人との関係に問題を抱えることもある。ごく普通の暮らしをしている親戚や友人と価値観が合わなくなったり、自分のしている Mausk 的な振る舞いに理解を得られなかったり、かつての距離感を保つことが難しくなるケースもある。Maavalla Koda 内で、自分の友人や家族の暮らし方を批判されることもあり、「排他的」と感じずにはいられない時もあったという話も出てくる。

Mausk 関連の集まりを通して、新しく紡がれていく関係性もあれば、Maausulised となったことで、それまでの関係にマイナスの影響が及ぶこともある。自然と文化をひとまとまりのものとして捉える視点を持ち、自然と共に生きる“mõnus”な暮らしを志向しながらも、人間同士の間では“mõnus”な関係を保つことが困難なことが少なくないという現状がある。Mausk が可能にするひとつながりの自然と文化の捉え方がありつつも、実際暮らしていると Maavalla Koda の内でも外でも“mõnus”の達成はされない。しかし、それは大きな問いを投げかけるものなのではないだろうか。つまり、いくら「対話可能」だとしても、自然との関係は、人間同

士の関係と同質であるとは言い切ることができないかもしれないということだ。人間が自然と“mōnus”な関係を築くことができると自負していたとしても、それが自然にとっても本当に“mōnus”なものなのかどうかは、慎重に考える必要がある。

4.4 Maausk のパッチワーク状況

ある Maausuline ではない人が、多くの Maausulised は自分自身のために Maausk からいくつかの要素を選択して抜き出し、活用しているのではないかと述べていた。その指摘はある程度当たっているものだ。Maausulised には当然のことながら幅広さがあり、日常生活の中で本当に「信仰」し、その考え方に則した生き方をしている人から、Maausk の哲学に賛同するにとどまるという人までいる。ネオペイガニズムの特徴として、折衷的であることが挙げられるが、Maausk と Maausulised も時代や場所を越えて、様々な要素を吸収している。インタビューの中で、突然北米の先住民族のエピソードが挿入されることや、スタジオジブリの映画への共感が示されることもあった。また、エストニアと同じフィン・ウゴル語派に属するロシア連邦のマリ・エル共和国から、ネオペイガングループのメンバーが訪問した際に、Maausk 側がマリの儀式を取り入れたということもあった。

Maausk は、古い文献や祖父母が口頭で伝承した内容を収集し、構成し直すという点においてパッチワーク的であるし、Maausulised もそのパッチワークの中からすべてを採用するのではなく、自分たちの生活に導入できるものを導入するという点で、さらなるパッチワークを産み出している。「良いとこ取り」「寄せ集め」と呼ぶか、「自由」「創造的」と呼ぶかは別として、このパッチワーク状況は、Maausk のリアリティである。「エストニア」という明確な境界線が、歴史上安定して定まっていたことが少なかったエストニアの人々は、「自文化」なるものの存在感が薄いということを意識せざるを得ない（それゆえのナショナリズムが発達している一方で）。国や文化という区切りが、その時代の流れによって移り変わることを、文字通り身をもって経験してきたからだ。このような背景（ある意味では「エストニアらしさ」である）を持っているために、境界線の緩さには寛容であり、完全には言わずとも、自由に選び取り、組み合わせ、自分のものとするに長けているのかもしれない。そのような文脈において、Maausk やその他のネオペイガニズム的なものが、現代エストニアにおいて、スーパーマーケット風の消費を促しているとも考えられる。「Maausk らしい」生活をしようと真摯に取り組んでいる Maausulised がいる一方、多くの Maausulised は、それが Maausk なのか、Maausk の考え方に似ている日本のアニメ映画なのかにこだわることをせず、自身の思考と生活を構成する要素として自在につないでいくという方法を取っている。

4.5 信じているけど信じていない

Maausk のフォロワーを指す“Maausuline”は、その語の中に信じているという意味が含まれ

ているのだが、大学生になって、Maausk の「信仰」に疑問を抱くようになった N さんのように、「私は Maausuline だけど、信じていない」と言う人がある。矛盾する発言なのだが、「信じているけど信じていない」というどっちつかずの曖昧さは、Maausulised の本音なのかもしれない。Maausk は、「宗教以上」のものなのだから、Maausuline になるということは、「宗教」の一部になるということではない。「私にとって Maausk は宗教ではなく、生き方だ」と話していた S さんも、生活のあらゆるところに Maausk の影響を浸透させることが理想であるため、「宗教」という分野に限定された狭い捉え方には違和感を持つのだろう。

一方、Maavalla Koda 設立の目的は、「信教の自由」のためだった。国教は存在しないのに、エストニア政府は特定のキリスト教会にお金を与えていて不平等であるという主張を、Maavalla Koda はしている。このような場面では、Maausk のキリスト教と並ぶような宗教性を持つものとしての側面が強く打ち出される。これは「自然信仰」として分類される事実を逆手に取った戦略的なものである。また、D さんは、世俗社会である現代エストニアで「聖」について語ることは難しいと指摘し、何か目に見えないものを「信じている」という点では、キリスト教徒と理解し合えるところもあると述べる。スーパーマーケットやショッピングモールが聖地であるかのような価値観を持つ人々が多い中、Maausk や他の宗教は、そうではない道を示しているのだと。

タイラー式の宗教の最小限の定義「霊的存在への信念」をもってするなら、Maausk は宗教であると言えるし、Maausulised 自身もある程度は Maausk の宗教性を認めている。しかし、一般に「宗教嫌い」を自負するエストニア人にとって「宗教」というレッテルを貼られることはマイナスの感情を生じさせることがあるため、時と場合によって「宗教である」「宗教でない」という両方の主張がなされる。しかし、本稿においては、Maausk が宗教であるか否かが重要なのではない。それよりも、Maausk を通して、人々が世界といかに向き合っているかという側面に光を当てることが目的であるからだ。Maausulised の「信じているけど信じていない」という事態は、パッチワーク状況のひとつの表れである。様々な要素を自在に組み合わせていく過程の積み重ねである Maausk は、既成宗教のように組織的に秩序づけられた信仰明確な「信仰」や「信条」を持たない。そのため、Maausulised 自身も「Maausk とは何なのか」という問いに対する回答を用意できていないわけではない。それぞれが、その毎日の暮らしのただ中において、自然や先祖など、多様な存在とのつながりを意識しながら生きることについての試行錯誤を重ねているのである。

5. おわりに

スピリチュアリティは、既存の体制への不満の受け皿としての役割を持つとしばしば指摘されるが、Maausk にはそのようなネガティブな側面での求心力だけではなく、ポジティブな側面

も見える。北方十字軍の時代からのキリスト教や工業化の影響を否定的に捉え、逃れようとしたところで、それらが無かったことにすることは不可能だ。生活のいたるところにキリスト教や「文明」が刻まれ、染み込んでいるし、クリスマスのようにペイガンのものとキリスト教が分かちがたく結びついているものも多くある。それは、ソビエトの記憶についても言えることだ。歴史の積み重ねを、部分的に削り取ることはできない。Maausk は、「古き良きエストニア」という幻を追っているわけではない。それは、キリスト教や文明やソビエトや、自分たちを支配してきたものを問い直し、何とか自前で生きようとする努力なのだ。「純粹に」「エストニアらしく」生きることは無理だと知っているし、そうしたいわけではない。ただ、新たな価値観を生み出し、この時代にあって自然も人間ももう少しうまく生きていくことができるような方法を見出そうとしているのだろう。

エストニアには、Maausk の存在は認識しているが、詳しくは知らないという人々が多い。知名度はあっても、その詳細はまだまだ人々に知られていない Maausk の影響力は過大評価できない。しかし、Postimees が行なったアンケートに表れているように、自分の生活を顧みると、Maausk に最も近いのではないかと考える人々いることは確かだ。もちろん、Maausk は自然と人間の関係の結び方のひとつの方法である。Maausk 以外のやり方で自然と自分をつないでいる人も多くいるので、Maausk の方法が優れていると判断することはできない。

Maausk についての記事には、「ネオペイガニズム」や「自然崇拜」として Maausk を紹介しているものが多い。しかし、Maasulised は自然を崇拜の対象として持ち上げたり、「エコ」のために保護したりすることに興味があるのではない。これまで生きた人々がどのように自然と関係を持っていたかに関心を持ち、他者としてではなく、つながりをもって共に“maa”，すなわち「エストニアの土地と文化」を生成してきた相手として自然と向き合うのだ。そして、「宗教」というひとつの分野に区切られたものではなく、パッチワーク状況における混沌や多様性、矛盾を内包しながらも、生きていることの全領域をまたいで世界を再構成しようと試みている。「自然とは何か」「人間とは何か」という問いを、Maausk は統合し、両者が一体であると考え。つまり、「自然と文化はひとつである」と結論づけているのだ。自然と文化の二元論ではなく、デスコラやラトゥールが述べているような、自然も文化も連続したひとつながりの関係性の中にあるというアニミズムの世界の見方は、人間中心主義を克服するための手がかりとなる。このことに留意しながら、エキゾチズムやオリエンタリズム的な視線に注意をしつつ、今後より深く Maausk の思考法を探っていきたい。

また、タイラーによるアニミズムの定義、「靈的存在への信念」も、人間以外の生き物が存在するという意味では人間中心主義を乗り越えるため、今なお吟味するに値するものである。ただし、さらに加えるべきことは、タイラーが用いたような単純な擬人化としてのアニミズムではなく、ヴィヴェイロス・デ・カストロが提案したように、非人間にも「人間性」があり、人間も非人間も共に関係性を紡いでいく互いに等しい存在であることを認めるという、より広い

意味でのアニミズムを考えなければならない。Dさんは、人間はもっと敏感になるべきだと話した。つまり、関係性の一部としての自覚をもって振る舞うようにしなければならないということである。世界に人間が個として存在しているのではない、という当然のことを Mausk は人々に気づかせる。たとえ目に見えなくとも、人間以外の存在がいるならば、それらとの関係を保たずに “mõnus” に生きていくことはできない。

霊やスピリットを考えない世界が、はびこり権威を握っている。特にアカデミックな場では、見えるもの、計れるものが世界のすべてであるかのような錯覚が前提とされる場合が多い。神話やファンタジーなら、受け入れられるだろう。しかし、「科学」はそこに決別しなければならないという強固な観念がある。文化人類学においても、文化相対主義の名のもと、複数の文化と単一の自然という「客観的」な世界の捉え方を保ってきた。今、そのような捉え方もひとつの世界の見方、文化であることを自覚する。目に見えない存在を意識し、敬うこと。自分の目に見えていないところにも知らない世界があるという事実を謙虚に受けとめることができるなら、より実りの多い探求が可能となるだろう。クリンギットのストーリーテラーであるポプサムが来札した際に述べていた、「スピリットについて語ることを恐れるな」という言葉と向き合うことで、Mausk の深みに漕ぎだせるだろうか。

「数百万の霊の生きものは、見えねども地上を歩む。

われらが目覚める時にも、眠れる時にも。」

—ミルトン

(ほんま あいり・歴史地域文化学専攻)

参考文献

〈日本語文献〉

伊藤雅之、樫尾直樹、弓山達也（編）

2004 『スピリチュアリティの社会学』、世界思想社。

岩田慶治

1989 『カミと神—アニミズム宇宙の旅』講談社学術文庫。

島藺進

2009 「スピリチュアリティ」『文化人類学事典』、pp.474-475、日本文化人類学会（編）、丸善。

鈴木徹

2000 『バルト三国史』、東海大学出版会。

鈴木正崇

2009 「アニミズム」『文化人類学事典』日本文化人類学会（編）、丸善。

関一敏

2004 「アニミズム」『宗教人類学入門』pp.2-12、関・大塚（編）、弘文堂。

タイラー, E.B.

1962 『原始文化』 比屋根安定 (訳), 誠信書房。

土佐昌樹

1997 「呪術の現代性—呪術論に見る現代西洋の他者表象—」『岩波講座文化人類学第11巻 宗教の現代』, pp.183-208, 青木保他 (編), 岩波書店。

間瀬啓允

1996 『エコロジーと宗教』, 岩波書店。

ベイトソン, グレゴリー

2006 『精神と自然』 佐藤良明 (訳), 新思索社。

ベイトソン, グレゴリー・ベイトソン, メアリーキャサリン

1992 『天使のおそれ—聖なるもののエピステモロジー』 青土社。

ラトゥール, ブルーノ

2008 『虚構の「近代」—科学人類学は警告する』, 川村久美子 (訳), 新評社。

<英語・エストニア語文献・ウェブページ>

Descola, Philippe

1996 Constructing natures: symbolic ecology and social practice, *Nature and Society*, pp.82-102, Descola and Pálsson(ed.), Routledge.

Maavalla Koda <http://www.maavald.ee/> (2014/08/01 閲覧)

Hiite Maja Foundation <http://hiis.ee/?lang=et&lang=et> (2014/08/01 閲覧)

Kaasik, Ahto

2003 Old Estonian Religions, *Estonian Culture*(2).

<http://www.maavald.ee/eng/uudised.html?rubriik=50&id=363&op=lugu> (2014/08/01 閲覧)

http://www.estinst.ee/publications/estonianculture/II_MMIII/kaasik.html (2014/08/01 閲覧)

Plaat, Jaanus

2003 Religious change in Estonia and the Baltic states during the Soviet period in comparative perspective, *Journal of Baltic Studies*, 34: 1, pp.52-73.

Postimees

2011 Lugejaile tundub sümpaatseim maausk, 2011/07/21

<http://arvamus.postimees.ee/506232/lugejaile-tundub-sympaatseim-maausk/> (2014/08/01 閲覧)

Ringvee, Ringo

2001 Religious Freedom and Legislation in Post-Soviet Estonia, *Academic journal article from Brigham Young University Law Review*, Vol.2001, No.2

Statistics Estonia

2011 Religion and Ethnic nationality. Distributed by Value and per cent.

<http://www.stat.ee/en> (2014/08/01 閲覧)

Tylor, E.B.

1874 Primitive culture, H. Holt and Company.

Viveiros de Castro, Eduardo

1998 Cosmological Deixis and Amerindian Perspecivism., *The Journal of the Royal Anthropological Institute*, Vol.4, No.3. pp.469-488.